

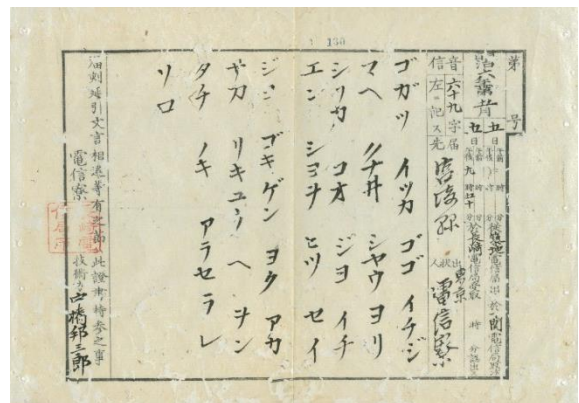
## 電報 — 迅速! 重要! な情報伝達手段 —

日本における電報の取り扱い、明治2年(1869)12月、東京—横浜間で始まります。翌年8月に大阪—神戸間、明治6年(1873)2月に東京—長崎間、同10年(1877)には北海道から九州まで電信線路が開通し、全国で電報が利用できるようになりました。電報は、地方の行政機関において迅速な情報伝達手段として必須のものでした。宮崎県文書センターが所蔵する明治初期以来の県の公文書の中には、電報が数多く含まれています。その内容は歴史的な重大事件から行政上の事務連絡まで多岐にわたります。

### 1 文書センター資料の中で最も古い電報

資料は、明治6年(1873)5月5日の皇居焼失を伝える電報です。これは、東京—長崎間の電信開通から間もない時期のもので、所蔵資料の中で最も古い電報です。

5月5日、東京築地電信局から発信された電報は下関電信局の取次ぎを経て、同日中に長崎電信局に伝わりました。長崎電信局からの伝達経路は明らかではありませんが、配達の違いがあり到着が遅れたことを報告する5月10日付の文書が残されています。電報が宮崎県庁に到着したのは発信から5日以上も後のことでした。



104303 『諸県到来及文案(1) 宮崎県』

(訳文)

五月五日、午後一時前、宮内省より、膝下皇城一円焼失、聖上御機嫌よく赤坂離宮へ御立ち退きあらせられ候

### 情報が届くまでに3週間

電信網が整備される以前は、宮崎県への情報伝達には非常に時間がかかりました。

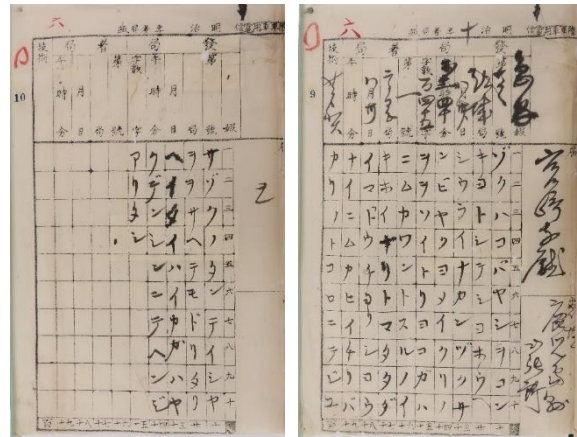
明治6年(1873)、政府が各府県への布告到達日限を定めましたが、最も日数がかかるとされたのが宮崎県で、21日でした。これは東京よりも20日、隣県の鹿児島と比べても4日も遅いものでした。

## 2 電報で伝えられた重大事件

### ■ 西南戦争末期の戦況

西南戦争の後半期である明治 10 年（1877）7 月から 8 月にかけては宮崎県内各地も戦場となりました。このため、所蔵資料の中には、政府軍の侵攻にともなう事務連絡や戦況などを伝える電報が残されています。

資料は、8 月 30 日、都城出張所から宮崎支庁宛てに出された電報です。和田越えの決戦後、敗走する西郷軍が小林に進軍、各所を襲撃しながら鹿児島方面へ向かっている状況を伝えています。



104753 『戦状報告録』

※9月1日、西郷軍は鹿児島へ突入し私学校を占領  
24日、城山総攻撃（終戦）

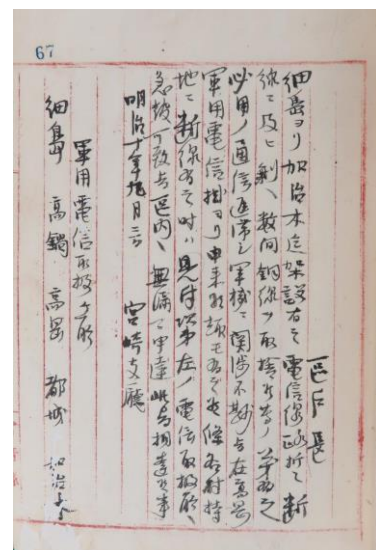
（訳文）

賊は小林を根拠として諸方へ襲来、就中なかんづく三百余名、栗野を襲い取り、横川に向かわんとするの勢いなりと、また只今、同地より庄内に向かい一里ばかりの所にて、巡查、賊の探偵者を押さえて戻りたり、兵隊はいかが、早く電信にて返事ありたし

### 西南戦争と電信妨害

「九州地方の電信網は、西南戦争を通じて飛躍的に拡充された」と言われていますが、宮崎県も例外ではありません。政府は電信網を整備し、電報を用いて迅速な作戦伝達や情報収集を行うことで戦況を有利に進めました。電報の重要性が高まり、それにもなつて電柱・電線の破壊や盗難などの妨害工作が増加しました。

右の資料は、電信線保守に関する通達です。宮崎支庁から区戸長に対し、「細島から加治木までの電信線路が折々断線し、通信が遅滞して軍機に関わるので、見つけ次第、電信取扱所へ報告することを区内に周知するように」と指示しています。電信妨害の取締りには苦慮したと見え、このような通達が度々出されています。

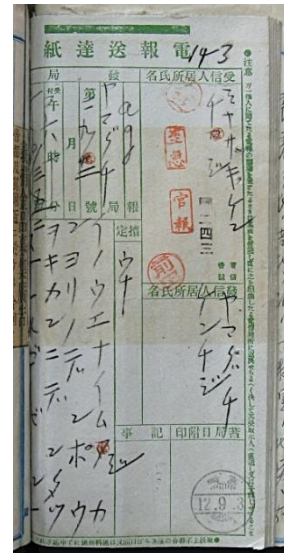


100479 『鹿児島県布達』

### ■ 関東大震災の第一報

資料は、地震発生 2 日後の大正 12 年（1923）9 月 3 日、山口県知事から届いた電報です。内務次官からの電報を伝達するもので、電報送達紙 10 枚にわたって地震の情報が記されています（画像はその 1 枚目）。

これ以降も被災地の状況などが次々と電報で届いており、『雑書（東京地方大震災書類）』の中には、48 通もの電報（送達紙及び訳文）が含まれています。



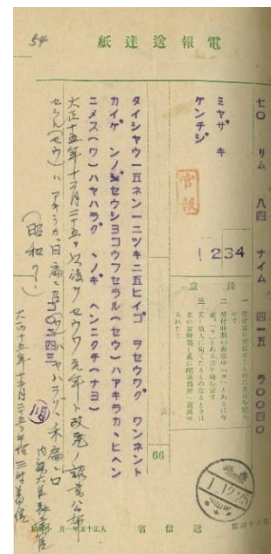
3873『雑書（東京地方大震災書類）』

（訳文）

井上内務次官よりの電報を貴官に伝達す、一日午前十一時五十八分当地大地震あり、火災各所に起こり、東京の大半殆んど烏有に帰し、人畜の被害、財産の損害計り知るべからざるものあり、非常に大規模の救護を要する見込みにして、衛生材料、食糧等多数を要するを以て、貴管下に於いて右等の材料を予め準備し置かれ、何時にても当地の救援に当てらるる様、計画を立て置かれたし、尚貴官に於て、便利の方法を以て附近各地方長官に右の旨伝達せられたし、尚今回の地震々源地は当地を距る十数里の地点に在るが如し

### ■ 新元号は「昭和」？ 改元を伝える電報

大正 15 年（1926）12 月 25 日、午前 1 時 25 分、大正天皇が崩御します。この情報は、電報によって午前 5 時過ぎには宮崎県へ伝わっています。さらに、同日の午後 3 時には新元号について知らせる電報が届きました。それが右の資料です。送達紙の余白に書き込まれた訳文の最後には、文字の確認のためか、（昭和？）とあります。



20952『大喪』

（訳文）

「大正 15 年 12 月 25 日以後ヲ セウワ元年ト改元ノ詔書公布セラル （セウ）ハ アキラカ、日偏ニ召 （ワ）ハ ヤワラグ ノ木偏ニ口 内務大臣秘書官」

### 3 県庁舎建築に関する電報

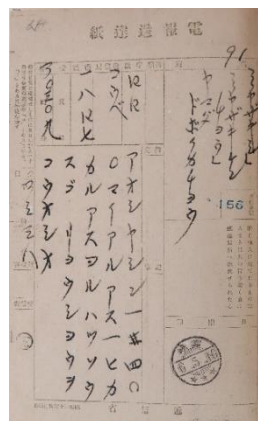
宮崎県庁本館庁舎は昭和7年（1932）に竣工しました。現存する県庁としては全国で4番目に古く、九州では唯一の戦前の庁舎です。この建設工事においても電報が活用されています。特に、神戸に拠点を置く設計者置塩章氏<sup>おしおあきら</sup>と宮崎県との間の連絡には、迅速に情報を伝達できる電報は必須のものでした。

#### ■ 置塩氏から土木課長宛ての事務連絡

（昭和6年5月16日）

（訳文）

青写真一四〇〇枚ある、明日一日かかる、明日夜発送す、御了承を乞う、置塩



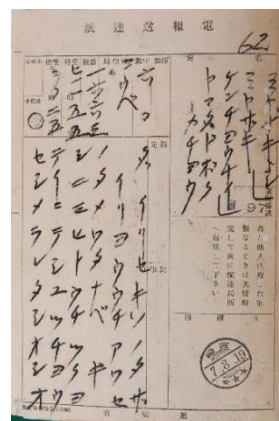
44392『県庁舎建築修繕』

#### ■ 置塩氏から土木課長宛ての事務連絡

（昭和7年8月19日）

（訳文）

大理石その他材料打ち合わせのため、渡辺技士、二三日、当地着く予定にて出張せしめられたし、置塩



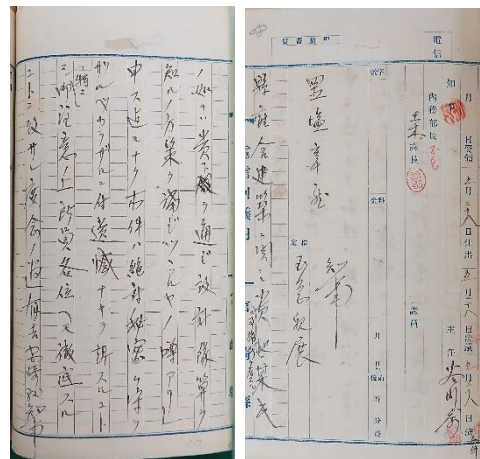
同上

#### ■ 知事から置塩氏宛ての電報案

（昭和6年5月28日）

県から置塩氏へ宛てた電報は、案文のかたちで残っています。資料は、設計予算を漏らさないよう念押しする内容の電報案です。

これに対し、置塩氏は即日、書簡で返信をしています。そこには、事務所の信用問題に関わるため、常に情報漏洩を警戒し、親しい友人との会話であっても入札価格については「サアドウカナ」と答えていることなどが書かれています。



同上

(解説文) ※旧字を新字になおし、読点を付してあります。

置塩章宛 知事

至急親展

県庁舎建築ニ関シ、貴地ニ事務所ヲ有スル某氏ノ如キハ、貴下ヲ通ジ設計予算ヲ知ルノ方策ヲ講ジツ、アルヤノ噂アリ、申ス迄モナク本件ハ絶対秘密ヲ守ラザルベカラザルニ付、遺憾ナキヲ期スルコトニ特ニ御注意ノ上、所員各位ヘモ徹底スルコトニ致サレ度、念ノタメ、有吉宮崎県知事

## 設計者 置塩章と県庁舎建築事業

置塩章氏（1881～1968）は大正から昭和期、関西を中心に活躍した建築家です。茨城県庁舎（昭和5年完成）など公共建築物を多く手掛け、「斯界の権威者」と認められていたことから、置塩氏へ設計を依頼したと考えられます。

県庁舎は、置塩氏の作風である近世ゴシック様式で、総工事費 72 万円、延人員 7 万 2,500 人、工期 1 年 4 か月余をかけて完成しました。この大事業は土木課に代わり新たに設置された県庁舎建築部によって進められました。



宮崎県庁舎建築部部員一同（前列右から2番目が置塩章氏）

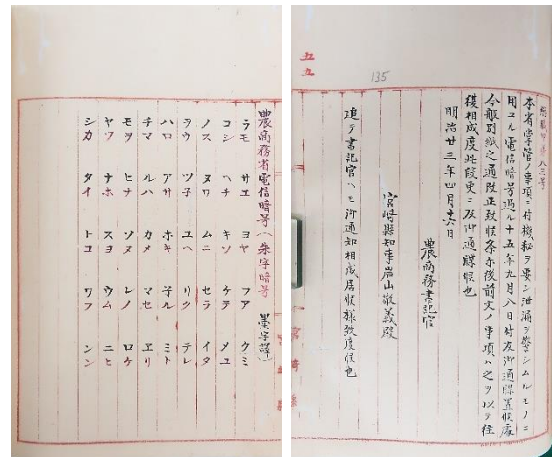
## 4 機密事項は暗号で

### ■ 農商務省が用いた暗号

情報漏洩を防ぐため、機密事項は暗号を用いて送信されました。

資料は、明治 23 年（1890）に農商務省から届いた通知で、暗号の改正を知らせるものです。

この文書から、明治 15 年（1882）にも暗号が通知されていたことが分かりますが、現在のところ所蔵資料の中には見当たりません。これは、旧暗号符は返却・焼却するよう指示されていたことと関係があると思われます。



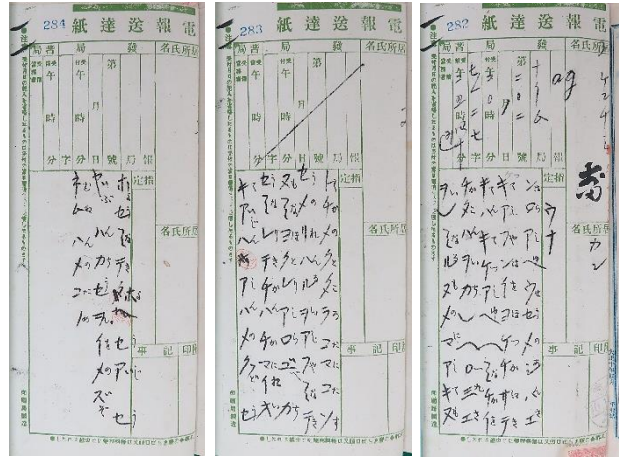
3829(2-1)『雑書（枢密文書・会計に関する文書）』

はらたかし

## ■ 原 敬の暗殺に関する電報

大正 10 年 (1921) 11 月 4 日、現職の首相である原敬が、東京駅で 1 人の青年に襲われ、殺害されるという事件が起こりました。

文書センターには、犯人の情報を伝える暗号電報が残されています。事件翌日、内務次官から県知事宛に届いたもので、一見、「シロアヘウセ…」と意味を成さない文字の羅列になっていますが、受信後に書き込まれた解読文 (右側の平仮名) によって、その内容を知ることができます。



102887『雑書秘書人事』

(訳文)

原首相の暗殺者は大塚駅<sup>てんてつ</sup>転轍手 (中岡良一) (十九歳) なる者にして、目下のところ他に多数の連累者なきも、なお取調中なり、貴管下において人心の動揺無きよう充分注意を望む、念のため

## 原 敬 (1856-1921)

原敬は安政 3 年 (1856)、岩手県盛岡市に生まれます。新聞記者から官僚となり、外務次官などを歴任、第 4 次伊藤内閣では通信大臣、第 1 次・第 2 次西園寺内閣、第 1 次山本内閣では内務大臣をつとめました。大正 7 年 (1918)、立憲政友会を率いて内閣を組織します。爵位を持たず衆議院に議席を有する日本最初の総理大臣だったので「平民宰相」と呼ばれました。

大正 10 年 (1921) 11 月 4 日、原は東京駅で夜行列車に乗車しようとしていたところを大塚駅の転轍手中岡良一に襲われ、短刀で胸を刺されて死亡しました。この事件は日本で現職の首相が暗殺された最初であり、原の不慮の死は政界再編成へ大きな影響を与えました。



出典：国立国会図書館「近代日本人の肖像」

(<https://www.ndl.go.jp/portrait/>)